

銀行新開社 奇蹟本



雄健強大なる國民は、亦た勤儉にして、貯蓄心に

饒める國民なり。英國然り、佛國然り、獨逸亦た

然り。

蓋し競争は、現今世界の**大勢**なり。苟くも、此間

に立ちて、雄を列國と競はんとするものは、其の何れ

の邦國たるを問はず、先づ國力の充實を圖らざるも
のほあらず。何となれば、今日列國の競争は、實力
の競争なり、赤手空拳を以てしては、單に競争場
裡の勝利者たる能はざるのみならず、殆んど一國とし
て、其の存在をすら保つと難ければなり。

國民の活動は、國力の充實に俟たざる可らず。而

して勤儉貯蓄は、國力充實の唯一の條件とはいふ
能はざるも、其の主要なる一條件たり。何とあれば、
國力の充實は、畢竟するに、國民各個の實力の
充實に外ならざればなり。而して箇人の實力は、勤
儉貯蓄によりて培養せらるゝと、決して尠少に非ら
ざればなり。夫れ既に然りとせば、我が國民に向つて、

勤儉貯蓄を奨励するは、今日の急務に非らずして何ぞや。

勤儉ならずんば、貯蓄すると能はず。然かも、貯蓄心無くんば、勤儉なる能はず。否や貯蓄心無き勤儉は、其實勤儉ならざるに均し。所謂宵越の金を使はずといふが如きは、如何にも金錢に淡泊なる、江戸

兒の意氣を見るべしと雖も、然かも、之れ雄健強大なる國民の氣象とはいふ可らざるなり。夫れ遠慮なくんば、近憂あり。若し我が國民にして、其の富強を將來に期せんと欲せば、宜しく今日に於て、勤儉貯蓄の精神を養成し、其の實力増進に努むる所無かる可らず。

頃日牧野元次郎氏、『金』と題する小冊子を刊行

せんとして、予に來りて一言を題せんを求むるあり、

乃ち卑見を開陳して以て序文に代ふと云爾。

明治三十四年七月十三日

國民新聞社に於て

徳富猪一郎

序

古も今も、老も幼も、黄色人も、白哲人も、凡そ人として此世に生存する者は、唯だ此金と云ふものゝ爲に、苦勞せざる者は殆ど稀なり、生命の次は金、時に或は金の次に生命の來ることもあり、朝な夕な、唯だ之が爲に心配して、曾て心を安んぜず、寸時も金なるものゝ志想を解

脱すること能はざるなり、人事に夫れ程必要なる金、重寶がらるゝ金、誰にもすかるゝ金、此金に對して世人の有する智識の程度いかんと顧みれば、存外其考の低きものありと思ふ、人は唯だ之を得るに熱心にして、而かも能く其性情を窮むるもの尠し、予が本篇を草する所以の者は、聊か其間の消息を傳へて金ある

ものゝ性質を明にし、而して其勢力と運用の方法とを考へ、併て金より生ずる千緒萬端の出來事、及び之より及ぼす社會一切の現象に就て、敢て説明と論難とを試みんとす、然りと雖も、予や極めて多忙の身、構思の暇尠し、立論の精確は素より望む可らざるなり、唯だ思出づるまゝを記するのみ、其所論の粗笨にして

文意の一貫せざるは素より其期する處なり
讀者豫め其意を諒してよ。

芝櫻川の寓居に於て

著者識

目次

第一 金の性質

金とは何に？——金は萬能の神なり——人は皆金の神の
信者なり——郷に入りては郷に従へ——拜金宗の本義を
解せよ——守錢奴——紀文大盡——金の勢力——人多く
は金の奴隸なり

第二 金に對する人の覺悟

經濟的に金を集むること——集め得たる其金に執着すべ
からざる事——たゞ其成功を樂しむこと——經濟的と慈

惠的とに散金すべき事

二

第三 金儲の秘訣

身體をして健康ならしむること——世間を廣く見ること——
——社會的智識を多く藏蓄すること——時間と勞力とを
空費せざること——何事も無益に費すと勿れ——收支を
明かにすべし——克己の精神と正整の習慣とを持續すべ
し——金錢の漏口を堅く防げ——仕拂を速かにせよ——
小は大の積なるを知らざるべからず——決して急ぐ勿れ
——忍耐と勉強とは富を得るの確實安全なる方法也——

相場と賭博とは斷じて爲す勿れ——金は活して使かへ——
借金が多くは其身を滅す——親しき人より金を借る勿れ

第四 貸金法

其人を見るべし——其使途を見るべし——其擔保品を見
るべし——金貸と慈善と混同する勿れ——泣言云ふ人に
は金を貸す勿れ——金を貸すは利息を取る爲めのみ考
ふ可らず——貸したる金は感謝を伴ふて返金せしむるを
要す——金を貸す上に於ては情誼を容るゝ勿れ——高利
を食る可らず——貸主は借主より利口ならざる可らず——

三

金を貸すには其始終を考へよ——菓子折の爲に心を枉ぐる勿れ

第五 貯金法

不動貯金の由來——其方法——其計算と利益——其優勝なる點——其運轉——不動貸金の方法——其利益——不動貯金及不動貸金の趣味——不動貯金銀行の設立

第六 結論

金より生ずる社會上の出來事

金

第一 金の性質

牧野元次郎著

金とは何に？

朝な夕なこの金の爲に苦勞する人間なれば金とは何に？

なる簡單の疑問に對しては何人も明答を與ふるに躊躇せざるべし今試に之を學理的に説明すれば、
金とは通貨の總稱にして富財の一也

とも云ふべし、世人の多くは金と富財とを混同して、金の外に富財の存することを知らず、富財は金より外になしと考ふるものゝ如し、誤れりと云ふべし、然りと雖も、其誤謬は誤謬なりとして、茲に攔き、予は今奇矯的に金の定義を下さんか

金は萬能の神なり

とも云はん、何を以て然か言ふと云へば、凡そ金の神の御利益を蒙むる時は、馬鹿なる人も忽ち利口となり、めし炊くお三も忽ち奥さまと變じ、種蒔く權兵衛も忽ち殿様となる、是

れ皆金の神の御威徳の然らしむる處なりと云ふべし、金の力は高傑の士をして操を變ぜしむ、美人をして芋兵衛の枕に侍づかしむ、無理も通りて道理となり、地獄も金の沙汰次第、罪ある人も忽ち罪なき人となり、罪過なき善人も忽ち獄舎の人となる、あわれ、鹿も馬となり、馬も鹿となる、名譽を得るも、學者とあるも、將た英雄豪傑となるも、金あらばなどて六ヶ敷ことやある、文明も富強も、皆金の反射なりと知るべし、金の神の御利益も又大ならずや、萬能の神と崇むるも敢て誣言にあらざるべし

人は皆金の神の信者なり

佛教、耶蘇教も將た如何なる宗旨も、信者の多きことは金の
 神に及ぶものはあらず、金の神を深く信仰する人は如何な
 る望も達することを得べし、國會議員などは朝飯前のこと、
 從五位男爵も欲するまゝ、ズット大きく各國政府を己の借
 地人となすも又敢て難からず之に反し、金の神に向つて惡
 口を言ふ變物は、其不幸憫さ實に見るに忍びざるなり、胸に
 萬卷の書を藏むるも口に三度の食を得ず、國柄を執るの技
 倆あるも、村長の地位をも得難し、清廉にして君子の行ある

人も馬鹿と一概に攢斥を受けて顧みられず、錦心繡腸も包
 むに衣なく掩ふに屋根なし、憫れなるかな

郷に入りては郷に従へ

佛教の信者多き里に入りては、佛教信者となれ、耶蘇教の信
 者多き土地に入りては、耶蘇教信者となれ、凡そ此世は拜金
 宗の最も盛に行はるゝ處なれば、浮世の俗事にたづさわ
 て世を送らんとする人々よ、須らく熱心なる拜金宗の信者
 となれ、然らずんば俗人に伍して輸贏を争ふこと難し、然り
 と雖も先づ

拜金宗の本義を解せよ

金は世人の争ふて皆大に貯へんとするもの然るに其巧拙によりて非常の差あり其巧みなるを樂んで能く金を集むる人は能く拜金宗の本義を解するものと云ふべし見よ人の出來ざる事を成したる時の愉快を考へよ何物の快樂かに如かん其成功したる結果を樂まずして其成功を見るに至りたる所以を樂しめ端艇競争に勝負を争ふ人はメタルを得んと欲するにはあらずして其メタルを得るに至る勝利を得んと欲するにあり得たるメタルは人に與ふるも

G

可なり唯其メタルを得たる勝利を樂しめ金を集め得たる成功を樂んで決して其得たる金に執着するなかれ集め得たる金は人に與ふるも可なり唯だ其集め得たる成功を喜べ然るに世には拜金宗の本義を誤解して俗に所謂

守錢奴

なるもの多し拜金宗の信者にして而も其賊なり彼等は金を集め得たる勝利と成功とを樂しまずして集りたる金にのみ向つて樂しむものなり金に執着して終生金の奴隸となるものなり此輩の集めたる金を稱して死金と云ふ世に

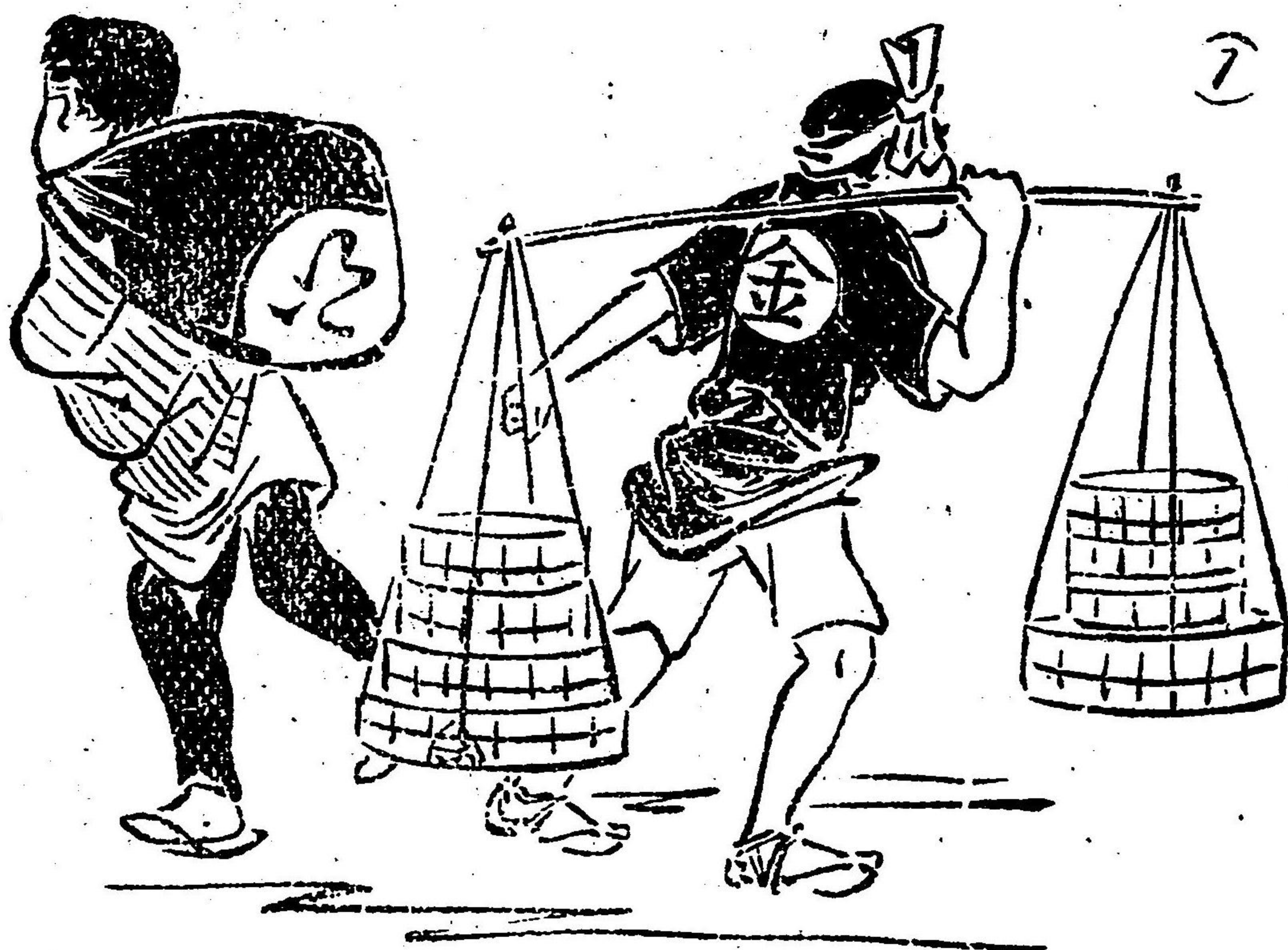
益する處なし

紀文大盡

は拜金宗の本義を解したるものなり其始め彼が商海に乗り出すや毅然として事に怖れず平然として生死の間に出入し其間敢て私利の爲に營々たらず掬すべき一片の義侠心恒に能く人の出来難き事をなして巨萬の富を重ねたるもの其勇氣と義心とは予輩の深く感ずる處なり彼の晩年の所行は敢て素より稱するに足らずと雖其成功を得るを樂しみて其金に執着せざる處は即ち彼の人に異なる所以

今の内せつせと稼いで
貯金をして早く樂にな
りませう

年季中にむだ遣ひをし
ないで不動貯金をして
今に立派な商店を開こ
う



にして、紀文大盡の本領なりと云ふべし、予輩の感服に堪へざる所なり、彼の晩年の散金法は實に云ふに堪へたりと雖も、其金に執着せざる超凡的志想を聊か其行爲に顯したるものと云ふべし、而して彼が金を投じて人を助けたるの美舉は蓋し枚擧に遑あらず、人の敬愛を受けたるも尤もなりと云ふべし、若し夫れ予輩が彼を以て拜金宗の本義を能く解したるものなりとの断定の當否を知らんと欲せば、讀者乞ふ彼が一生の歴史を研究して來れ、庶幾くは予が言の至當なるを知ると同時に、又能く拜金宗の本義を解することを得んか

十

金の勢力

金を稱して萬能の神と云ふ、既に其勢力の偉大なるを知るに足らん、金は權利なり、生命なり、金なくんば此世に立ち難しと云ふべし、人は言ふ學者は貧困の門より出づと、何ぞ圖らん、金なくんば文明教育の一片をだに受くること能はざるなり、豈に啻だ教育のみならんや、凡ての物、凡ての事、如何に世は進歩したりとするも、如何に世は發達したりとするも、文明の光は金なき人の頭上を照らさず、文明の恩澤は貧困者には霑はざるなり、人は言ふ醫は仁術なりと、何ぞ圖ら

ん、金なき人の爲には少しも仁術の惠を受くこと能はず、凡そ如何ある發明、如何なる進歩も、金なき人の爲には何かせん、金なくんば文明の餘澤を受くること能はざるなり、金なくんば生命を保つこと難きなり、あゝ何ぞ夫れ其勢力の偉大なるや。

人多くは金の奴隸なり

金の勢力偉大にして、人は皆其前に低頭平身す、金の願指に従ひて東奔西走又辭せざるなり、若し夫れ金の願指に従はず、亭々として天に嘯くものありとせば、我れ其少くも狂人

にあらずんば偉人たるを認む、偉人や世に甚だ稀なり、唯だ似て而して非なるの偉人は予輩屢々之を認むるも、其心事は一段陋しむべきものありて存す、あゝ蛆虫に等しきこの人間、金に向つて色氣を有せざるもの、黜きは怪しむを要せざる也

第二 金に對する人の覺悟

人間萬事金の世の中、浮世の義理としても金に縁を斷つこと難し、斷つこと能はざる此金に向つて人の知るべき覺悟の要點を擧ぐれば左の如し。

第一 經濟的に金を集むること
 第二 集め得たる其金に執着すべからざること
 第三 たい其成功を樂しむこと
 第四 經濟的と慈惠的とに散金すべきこと
 經濟的に金を集むることは、夫の吝嗇家の貯金とは異なり、人の盡すべき義務は盡し、人の濺ぐべき涙は灑ぎ、正理正道を蹈みて我慾を張らず、凡そ人として享くべき相當の娛樂は敢て求めて人後に立たず、悠悠々其所を樂しみて徒らに心を苦しめしめず、而して唯だ人に勝れたる才力と忍耐とを以て、至然に來るの富を受くべし、夫の營々として、金の外に

何の趣味だも解せず、人並外れて粗衣惡食し、目には一點の涙をも湛へず、爪に火を燈して金を集め、以て樂しみとなすものは、其心事の陋劣なる言ふに堪へんや、畢竟此輩は天地の大と至然の美とを解せざるなり、人間の一生朝露と壽を同ふするを知らざるなり、憫むべし。
 人は皆汲々として集金に勤む、良し我れ先づ其目的を達して澤山の金を儲け得たりとせば、人に勝れたる其才智と伎倆とを喜ぶべし、而して其成功を樂しめ！決して集め得たる其金に執着すべからず、集め得たる金は先づ經濟的と慈惠的とに散金すべし、其結果は積善の家に餘慶あるが如く、

又至然に金の集まるを見るべし、集散常なく而して恒あり、
夜盡き晝來り、晝盡き夜來るが如し、蓋し終局なしと雖も、其
人は常に富の圓滿を得べし。

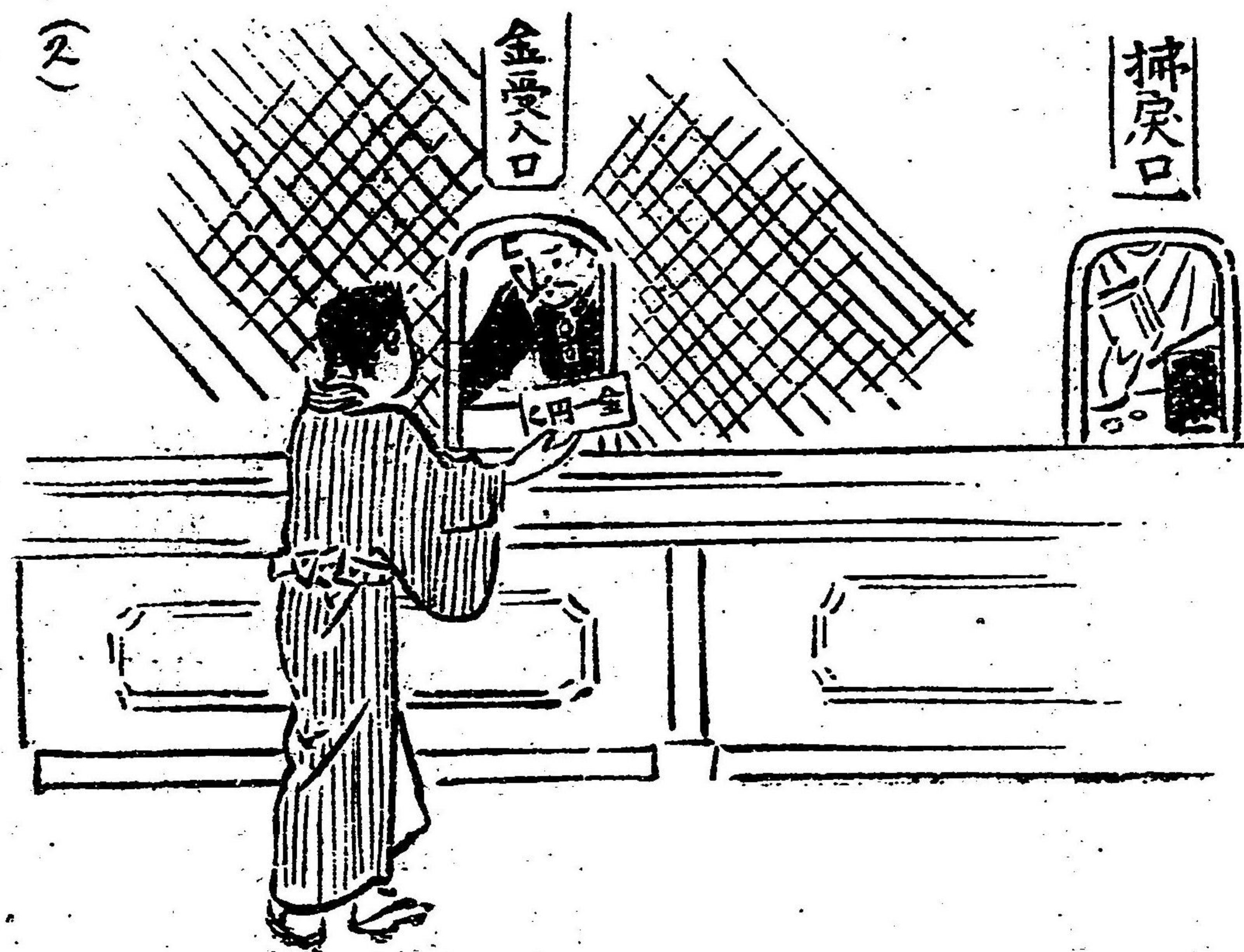
經濟的に散金すべし

とは俗に所謂無駄に金を費やさるる反語なり、金を投じて
四つ谷街道を修築したる鹽原多助の行爲の如き是なり、金
を投じて不毛の野に鐵路を布設し以て物産の増進を計る
が如き事是なり、金を投じてドックを修築し以て貿易の繁
榮を計るが如きこと是なり、金を投じて校舎を新築し以て

一圓を五十年目受

取の不動貯金に預

け入れ升



(又)

人才を養成するが如きこと是なり、金を投じて不毛の地を開墾し以て國益を増殖せしめんとするが如き事是なり、要するに將來の効果を目して投銀するを經濟的散金法と云ふ、經濟的に放銀するものは其家榮へ其國強し、かの紀文大盡が吉原の大門を三たび鎖したるが如きは、實に不經濟的散金法の好箇の一標本なりと云ふべし。

慈惠的の散金

とは鰥寡孤獨の不幸者を救助するが爲に金錢を投ずるを云ふ、慈惠的事業に放銀することは是なり、若し夫れ富める人

にして世にも不運の人々を憫み救ふの慈心あらば、夫の虚無黨は起らざるなり、夫の社會黨は生ぜざるなり、而して世は平靜に、四海浪穩かなるを得べし、人を救ふは人の爲ならず、つまりは我身の爲なりと知れ。

第三 金儲の秘訣

何事にも上手と拙手との區別あり、其差や霄壤も音ならざるなり、たとへば夫の圍碁にも本因坊の如き名人もあれば、また其の本因坊に正目を置き、亦た其人に正目風鈴つきにても叶はざる人もあり、其階段等級甚だ多し、さても様々の

世や、かの圍碁の如き一小局面の上に於てすら彼れ一石を置き彼れ亦た一石を置くにも拘はらず其結果に於て雲泥の相違かくの如し、圍碁既に然り、この社會に立ちて各々輸贏を争ふもの、其巧拙豈に圍碁の比のみならんや、舞臺は廣し、役者は多し、千變萬化、虚々實々、誠に以て好觀物ならずや、金儲の上手なるロスチャイルドの如きあり、バンダイビルドの如きあり、紀文大盡の如きあり、河村瑞軒の如きあり、平專、淺總の如きあり、安田善次郎、大倉喜八郎、古河市兵衛の如きあり、空手にして皆産を興したるもの、亦た一世の人傑と云ふべし、其間豈に秘訣ならんや

我も人も日夜金儲の爲に肝膽を摧く、人豈に拔目あらんや、然るに臣萬の富を重ねるものもあれば、囊中無一物の貧的もあり、共にこれ金儲の爲に心を苦ましむるもの而して其差斯の如し、其間豈に秘訣なからんや

金儲第一の秘訣

は身體をして健康ならしむるにあり、健全の身心は金儲第一の基礎なり、昔の貧的、今の長者、の大概身體の健剛なるを見ても知るべきなり、身體健全ならざれば勇氣なし、此荒き社會に立ちて人と輸贏を争ふこと甚だ難し、争ふたりと雖

も、毎に敗を取るは火を賭るよりも明かなり、身體の健全は心の勇剛を意味す、心勇剛ならずんば如何にしてか此世に立たん、社會は我利／＼亡者の集合體なれば心弱くては其生命を保つだに難し、況して商戰場裡の「チャンピオン」たる事をや

多病を誇りたる才子的時代は既に過ぎ去りて、今や實力を闘はすの時世と變じたれば最も健全の身心を有する人を要す、勇氣と忍耐と機敏とは皆健全の身體にやどるものなることを知らざる可からず

金儲第二の秘訣

は世を廣く見ること、是なり、今は昔と違ひ千里も一里の世の中なれば、一局部にのみ眼を注ぎて大局を忘るゝことある可らず、圍碁に於ても然り、一局部の勝敗にのみ眼を曝して全局を達觀するの明なくんば、良し一局部に於ては勝利を得るも、大局に於て失敗を招くや必せり、人事また斯の如し、一小天地の、一瑣事に齟齬して竟に世の進運と伴はず、終生小利に勝ちて大利を博するの機會を失ふ、寧ろ憫むべし、世は日一日と進歩して、昨日の物識りは今日の物識りなら

ざる時勢なれば、世の進歩に遅れず、文明の新事物に遭ふて驚かず、能く其妙味を咀嚼して、其利器を利用することに怠る可らず、廣く世を觀て、其進運に伴ふものは、即ち金儲の上手あるものなり、宇宙は大なり、天地は廣し、文運の進歩は長足なり、大局に眼を注ぎて、世界の到る處に於て鬪ふも、力量に於て敢て不足なきを覺悟せよ、一地方に於ては小利を博し得るも、廣き世界に於ては輸贏をだに争ふこと能はざるが如き人物は、今の世共に語るに足らざるなり、此輩を稱して俗に商海の不具者と云ふ。

世の進歩に遅れず、世界の到る處に於て、世界の人を相手に

勝敗を争ふものは、眞に商戰場裡の勇者なりと云ふべし

金儲第三の秘訣

は社會的智識を多く藏蓄すること、是なり。智識は金を生むの母なりと知るべし。あわれ金の爲に二六時中齷齪する我利々々連の組織に係はる。此不完全の社會に棲める人々よ。世海の荒き所は人情反覆の間にありと悟られよ。人情反覆の間に處して、泰然動かず、毅然として、其難所を切り抜けんとするには、先づ人間世界の妙むき組織と、不道理なる作用と、感觸とを窮めざる可らず。人の悲しむ心も、笑ふ心も、喜ぶ

心も、一見忽ち其奥底までも會得するの神通眼なかる可らず。かの單純なる思想と一片の道理とは、屢々人情と衝突して常に失敗を招くの根本なり。書生初陣の失敗は其好標本なりと云ふべし。

先づ人と云ふものに就て研究せよ。彼の笑ふは心底おかしきことありて嗤ふなるか。おかしからざる事にも或る一種の野心を以て、屢々大笑するものあるを認むべし。彼の喜ぶは心から喜ばしきことありて喜ぶなるか。喜ばしからざるも外形を飾らんが爲に喜ぶものあり。彼の悲しみは果して眞實の悲しみなるか。心に喜びて世間のおせむに悲しむも

のあり。其表裏の反目は人情の常なり。之を知らずして眞面目に世事を觀察せんか。失敗續きて至らん。次に社會と云ふものに就て研究せよ。社會の進歩は複雑を意味す。進歩したる社會は複雑なる社會なり。この進歩したる、この複雑なる社會に苟も輸贏を争はんとする程の者は先づ社會に存する規則と機關と運用の方法とを知らざる可らず。然るに能く之を知るもの尠し。如何にして勝利者たることを得んや。社會の規則を知らずんば社會の人たるを得ざるなり。社會の規則を知らずして此世に生存する人は、恰も地理不案内の地を歩行するが如く、東西南北また辨ず

可らず、歸るに道なく往くに路なし、唯々岐路に彷徨するのみ、憫むべし、亦喩へて言はんか、恰も闇夜に提灯なくして路ゆくが如し、鼻摘まゝるをも知らずして、手探りに歩を進めつゝある中に、溝に落ち入りて、果ては大怪我を招くが如し、愚と云ふべし、敵國と戦を始めんには、先づ敵國の人情風俗と地理とを辨へるの必要あると等しく、凡そ此世に立ちて勝敗を争はんとする程の者は、人事に關する一般の法則を辨へて、夢々、拔りある可らず、人の爲に過まられざるの用意にして、吾人の生命財産を保護する最要の利器と云ふべし、其利や護身刀若くはピストルの比のみならんや。

社會に存する諸々の機關と組織と運用法とを知らざる可らざるは、社會に生存する人の何人も異議を唱へざる所なるべし。然るに存外世間は愚かなるものにして、世の進歩に伴はずして新規の事物を解得せざる人甚だ多し、社會至然の力によりて、漸く新事物を知るに至る位の處にして、進んで其由來と作用とを研究して、以て他日の計に資せんとするもの、曉天の星の如しとも言はんか、此輩の如き心得にては、世界の全局に立ちて、世界の人と輸贏を争ふこと抑も難し。今や遠からずして、東隣に佛人住み、西隣に露人棲るの時、代も來るべし、深く心せずんば、蓋し千載の悔あるべし。

社會に存する諸々の機關を知らざる者は、瀛車瀛船の便を知らずして、昔の如く籠に乗りて道中をなすの愚を演ずるなるべし。社會に存する諸々の組織を解せずんば、大阪に送金せんとするに、簡便の方法を知らずして、危険の思をあしなから、舊來の飛脚に托するなるべし、愚と云はざる可らず。又不可抗力の危険、即ち天災地變の萬一の禍難を防ぐに、保險の方法あるを知らずして、唯天運に委するの馬鹿者あり、愚と云はざる可らず。

世の人よ、社會に存する諸々の機關と組織とを了解し、且つ之を運用する方法を熟知すること、を怠る可らず。而して

萬事を擧げて自働的なれ。自働は成功を意味す。總ての成功は自働に隨伴するものなれば、其心得を以て、卒先社會の機關を運用するの概なかる可らず。思ふに社會に存する諸機關の組織と運用とを知らずして、毎に他働的に動くものは、常に人後に落ちて、終生浮ぶ瀬なかるべし。此輩を稱して予輩は商海の盲目者と云ふ、非か。

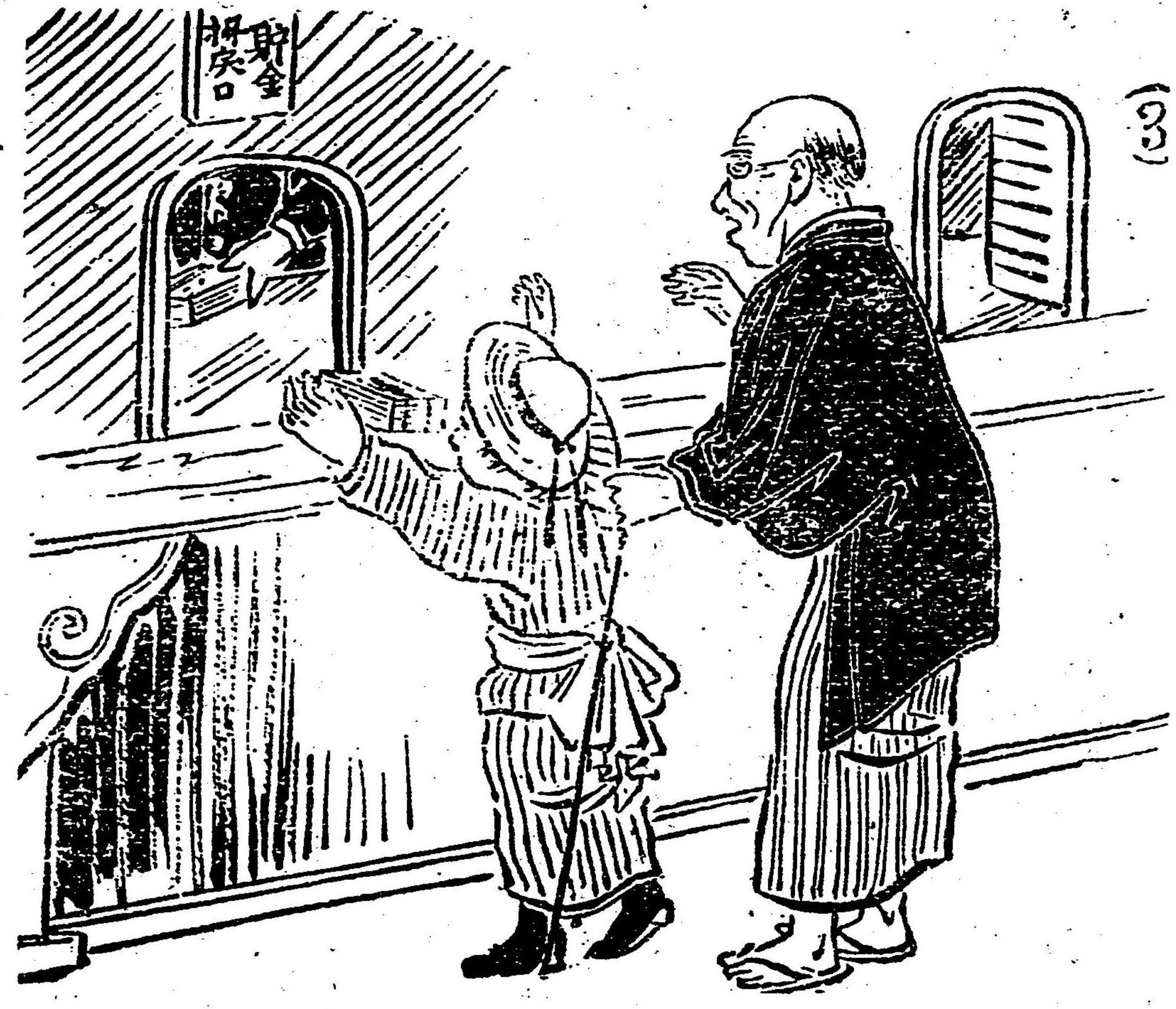
金儲の秘訣

として最も大切な事は、時間と勞力とを空費せざるに在り、時間と勞力とは、金錢を意味す。時間と勞力とを空費する

は即ち金銭を無益に費すと同じき也、夫れ金銭を浪費する
 は人皆之を忌むも、時間と努力とを空費するを以て左程に
 念とせざるは如何に未だ時間と努力とを以て金銭と同視
 せざるに因るか
 時間と努力とは金銭を生むの母なり、金銭は時間と努力と
 の子供なり、子供を得んには先づ其母たるものを求めざる
 可からず、而して其母たる時間と努力とは素と限ありて
 少く／＼するに於ては夫れ竟に捕ふること能はざるべし、
 力めて之を捉らへよ
 人間の一生は朝露と等し、幸にして五十の常命を保ちたり

子供や一億萬圓か大
 へんか御さつた
 な

老人 是れはをじいさ
 んが二十歳ばかりの時百圓不動
 貯金をして置た
 のが五十年たつ
 た今日こんな
 殖えて受取るの
 だよ



とするも、此短日月たんじつげつそれ竟つひに何をおぼかなさん然しかりと雖ことも事ことの
 成あらざるを以もつて單たんに此短このみじかき月日げつじつの爲ためなりとすることとなか
 れ、天地てんちの長久ちやうきうより打算たさんすれば人生じんせいの五十年ごじゅうねん誠まことに短みじかしと云
 ふべし、去さりながら能よく記憶きおくせよ、凡まづそ人の事業じぎよとして何なんの
 事業じぎよか、此五十年ごじゅうねんの星霜せいそうを以もつてして成就じやうじせざるものやある、
 若もし夫れ五十年ごじゅうねんを以もつて事ことをあすに足たらずとせば、千萬年せんまんねんの
 時ときありと雖ことも、事は竟つひに成あらざるべし
 長命ちやうめいの人過くわ去こを回想くわいさうせば、一生しやうは茫ゆめとして夢ゆめの如ごとくなるべ
 し而しかして夢中むちゆう竟つひに何事なんじをも成就じやうじせざりしことを悟さとるなる
 べし去さりながら先まづ試こころみに過すぎし昔むかしを考かんがへ見みよ汝あんぢの一生しやう如

何かに無益むえきに費つひやしたる時間じかんと勞力らうりよくとの多おほかりしことよ、無駄むた
 に費つひやしたる時間じかんと勞力らうりよくとは汝あんぢの一生しやうの大半たいはんを占しめたるを
 覺おぼゆるなるべし、これ即すおほち汝あんぢの一生しやうを短みじかしと觀くわんじたる所以ゆえん
 にして、これ即すおほち汝あんぢの一生しやう竟つひに何事なんじをも成就じやうじせざりし所以ゆえん
 也あり
 試しに一日いちじつの中うちに空費くうひする時間じかんの如何いかに多おほきかを許算けいさんし見
 よ、何人なんびとと雖ことも、一日五時間いちじつごじかん以上いじやうこの貴たつとき、この大切たいせつなる。一度
 過すぎては歸かへらざる此時間このじかんを空費くうひせざるものは稀まれなるべし、
 一日いちじつの中うち無駄むたに費つひやす時間じかんが五時間ごじかん位くらゐにて濟すめば、先まづ其人その
 は勉強家べんきやうかの方かたなるべし、相當さうたうの食事時間しじきじかん、休息時間きゅうしじかん、安眠時間あんみんじかん

は敢て時間を空費したるものとは云はず是れ生命を保つ
 必要時間なればなり予輩が一日の中に五時間以上の空費
 時間ありとなすは労働すべき時間中に存ずるとなるを知
 るべし胸に手を當てし先づ一日中に成したる事を考へ見
 よ友人と空談の爲に費したる時間はなきか何の効果を
 奏せざる事に費したる労力はなきか妄想の爲に思を焦し
 たる時間はなきか有り大に有りしなるべし予は今假りに
 大まけにまけて一日の無駄時間を五時間と定むれば一年
 間の總無駄時間は一千八百二十五時間となるまた人生五
 十年間の無駄時間を計算せば實に九萬二百五十時間とな

るなり今之を日に直せば三千七百六十日と十時間之を年
 に直せば約十二年となる一生の空費時間も豈に大ならず
 や而してこの十二年は全く労働し得べき時間なるを以て
 此の時間を有効に使用せんか何事か成らざらん成功手に
 睡して期すべき也咄！咄！！何等の横着漢ぞ事の成らざる
 を以て單に短日月の爲めありとなすことや

十二年の全き労働時間を得んには少くも三十六年の星霜
 を経過せざる可らず其所以は假りに一日の労働時間を八
 時間と定めて計算したるに據る果して然らば勉強する人
 は不勉強の人よりも總じて三十六年の長命を得たると同

勘定となる也、また快ならずや
 右の計算より推せば、人生徒らに長命のみが能にあらざる
 也、要は唯だ時間を空費せざるにあるのみ、人生れて一分時
 だも無益に費さず、能く力むるに於ては、假令は不幸短命に
 して三十年に死するとするも、其成したる事業は普通五十
 の人の成したる事業と少しも換りある可らず、時間を無駄
 に費さずして有効に使用するものは、短命にして短命にあ
 らざる也、時間を無益に費す人は、長命にして長命にあらざ
 る也、時間を節して能く力むる人は、短命なりと雖も、長命を
 保ちたるに均しと云ふべし

無駄に時間を費さず、而して幸に五十の壽命を保ちたりと
 せんか、其人の成したる事業は八十六歳の壽命を保ちたる
 普通の人の同じかるべし、八十六歳の時間決して短しと云
 ふ可らず、時間と努力とを最も有効に使用するに於ては何
 事かそれ成らざらんや
 夫の早世するもの何をか悲しまん、要は唯だ時間と努力と
 を無駄に費さるにあり、徒らに年を累ねるのみを以て能
 とすべからず、幸とすべからず、榮とすべからざる也、此輩の
 生命は、良し有形的に長命を保ちたるとするも、其生命や、事
 業を成すの上より大觀すれば、既に死したるものと云ふべ

し死したる心身それ世の爲に何の益する處ぞ無駄の事に
 一分の時間も費すこと勿れ無益の事に一片の勞力をも盡
 すこと勿れ總じて汝が一生は何事も有効に費すことを忘
 るべからず時間と勞力とを經濟的に費すは即ち事業を成
 す所以にして金錢と幸福とは求めずして來るもの也金儲
 の秘術之を措きて他にあらんや

金儲の心得

ともなるべき他の要點を左に列擧すべし

(一) 何事も無益に費すと勿れ

僕も來年から中學へ
 入るが僕の親父が若
 い時分に預けて置い
 た不動産金を今度受
 取つたので學資は十
 分あるそいだから安
 心だよ



- (二) 收支を明かにすべし
- (三) 克己の精神と正整の習慣とを持續すべし
- (四) 金銭の漏口を堅く防げ
- (五) 仕拂は速かにせよ
- (六) 小は大の積なるを知らざるべからず
- (七) 決して急ぐ勿れ
- (八) 忍耐と勉強とは富を得るの確實安全なる方法なり
- (九) 相場と博賭とは断じて爲す勿れ
- (十) 金は活して使かへ
- (十一) 借金は多くは其身を滅す

(十二) 親しき人より金を借る勿れ

右の各項を堅く守りて能く行ふものは、福德圓滿の長者となること請合なり、左りながら人の性、多くは薄弱にして行其言と叶はず、一時は奮發して其氣になるも、直にダレて終ふは實に衷けなき至り也

あゝ貧的！いやだゝ此の境界ドウしたら脱けられようかと云ふものあらば、我輩は勧めんとす、曰く右の各項を服膺して唯々

實踐せよ！

實踐せよ！！

(一) 何事も無益に費すと勿れ

何事も三字に注意せられよ、人は兎角金のみを無益に費すと勿れと教ゆるものゝ如くなれども、予輩は單に金のみに限らずして、一片の勞力も、一分の時間も紙の屑も、木の片も、將た又た一杯の水も併せて之を云はんとす、それ何事も無益に費すと無くんば金持になると誠に易からずや

(二) 收支を明かにすべし

収入と支出とを明かにし、収入の範圍内に於て支出を爲せ、闇雲にドリカなるだらう主義は最も忌むべし、月に一圓づ

ゝ足りなくなりても、五十年目には元利積つて三千九百四十四圓四十五錢五厘となる、又た驚くべきにあらずや、一家の經濟などは我れ關せず焉など、言はずに、入を計りて出づるを制し、安排宜しきを得るにあらずんば、逆も國家の經濟などを談ずる資格は無きなり、磊落氣取は最も惡し、己も困らず、人にも迷惑を掛けず、初めて以て國家の事に身を致すべし

(三) 克己の精神と正整の習慣とを持續すべし

先づ第一に良心の命ずるまゝを直行して、情の爲め、慾の爲めに横道に入らざるよう、平素心懸くると肝要なり、己を制

するとの難きは我人ともに認むる處大に克己の精神を養ひて併て規律正しき習慣を作れ秩序を重んじ事物を整理するの考は一日も念頭を離るべからず、放埒は最も慎むべきとなり

(四) 金銭の漏口は堅く防げ

●●●あしとは能く云ふたるものなり、此金なるものは兎角逃げたがるものなれば、其逃口は能く閉め切りて防がざる可らず、少しにても心に油断あれば、水の如く雲の如く自然と漏れて無くなるものなり、御用心召され

(五) 仕拂は速かにせよ

お金ありても仕拂の悪き人あり、これ泥棒根性のあるものと云ふべし、仕拂ふべき義務と仕拂ふべき力と存するにも拘らず、仕拂を難んずるは其心憎むべし、仕拂ふべきとあらば最も速かに之を仕拂へ、信用を増すの基なり

(六) 小は大の積なるを知らざる可らず

小事と雖も之を侮る勿れ、小は即ち大の基あり、小を慎まざる人は必ず敗る、成功決して見る可らざる也
小なりとて之を棄つ可らず、神武天皇時代の一厘錢も若し今日迄利殖するに於ては言葉を以て顯し得べからざる大金とはなるなり、萬や億や兆の桁にはあらず

(七) 決して急ぐ勿れ

緩々と怠たらず、氣永に勤めよと云ふとなり、コソナ事は誰でも知つてゐるとなれど、實行せずんば知らざると同じ兎に角も急ぐ可らず、絶へず怠たらず、氣永に道中を爲せ

(八) 忍耐と勉強とは富を得るの確實安全なる方法なり

これ當然の事にして殆んど説明の餘地だもなし、要は唯だ實踐躬行するに在り、實踐躬行甚だ難し、難しと雖も之を爲さずんば富者たるを得ず、洋の東西、時の古今を論せず、富者たるの秘訣は實に茲に在り、ゆめ疑ふ可らず

(九) 相場と賭博とは断じて爲す勿れ

僥倖を當にして富を得んとするは間違なり、決して得らるゝものにあらざるを記憶せよ、既に射倖心の存する以上は其人の運命を豫知するを得べし、曰く裏長屋の住居、垢付たる衣物、日に三度の食事も辛じて位なもの、夫の仲買を見よ、十年前も今日も格別身代に違ひはあらざるべし

夫の賭博打を見よ、いつも質屋通ひは免れざるべし、断乎として必ず之を爲す勿れ、此忍耐と勇氣なくば頼みにならぬ人間あるを自覺せよ

(十) 金は活して使かへ
 六ヶ敷言へば生産的に使用する事を云ふなり、何の効果を
 も生ぜざるよう金を使ふを死に金使ひと云ふ、碁に譬へて
 言へば無駄石を打つと同じ、無駄石多ければ其碁はどれも
 これも死するなり、金の使ひ道にも死活の二法あるを思ひ、
 深く心すべし

(十一) 借金は多くは其身を滅す
 金を活して使ふ人が借金するのは、少しも差支なく反て利
 益のあるものなれど、活して使の腕なき者が借金する程危
 険なるはなし、借金の爲に竟には其身を滅するに至る、假令

御嬢様の御支度は御
 立派なものでござい
 ます
 是は御父様が不動貯
 金を受取つたので夫
 れで十分に仕度をし
 て下さつたのだよ私
 は嬉しいは



貸す人ありと雖も、成算なくんば決して借る可らず貧しきの故に金を借るは卑劣なり、三度の食を二度に減ずるも決して借金すべからず、生計の不足を補ふ爲の借金は返し得るの見込あらざればなり、見込なきに借る既に人を仆すの心其奥底に在り、憎むべし

(十二) 親しき人より金を借る勿れ

金は兎角争の種とあるものなり、交誼を永く保たんとするには決して親しき人より金を借る可らず、若し返済の出来ざる時には至然と足が遠くなり、果ては多年の情誼も茲に破るゝに至る、深く思ふべし

第四 貸金法

考ふれば考ふる程六ヶ敷ものど感ずるは金貸の法なり、譯なきとと一概に思ふ可らず
金を貸すには先つ其人を見るべし、正直なるか？ 勉強なるか？ 伶俐なるか？ 正直ならざれば約束の期限を守らず、利子も納めず、元金も兎角倒され勝ち也、勉強ならざれば其人の商賣は常に不繁昌にして、貸したる金も竟には零に歸し、元も子も返し得る見込あらざるべし、伶俐ならざれば機を見るの明なく、借用資本運用の道も拙かるべし、隨て豫期の

収益を見るに能はず、利子も滞り勝なるを免れず、如何に正直にても、如何に勉強にても、智なき正直と勉強とは、必竟何の効果を結ばざるべし。

次に其使途を見るべし、使途正しからざれば、金を貸したる甲斐の無きものならず、却て其人の不爲となるもの也、使用方法を明言すると能はざる人には、貸すべからず、已の信服する能はざる仕事に投する金ならば、寧ろ断はるべし、後日の悔なかるべし、若し賭博、或は相場に使用する金ならば、如何に立派なる擔保を以て、如何に懇請を極むるも決して耳を借す可らず、要は其使用方法の生産的なるや否やを究む

るに在り

最後に其擔保品を見るべし、擔保品は確實なるや否や、如何なる場合にも滅失するの恐はなきか、若しありとせば、其豫防法は備り居るや否や、いつ何時世間に出しても普通の價格に賣れ行くや否や、其邊の注意肝要なり

信用貸も又た敢て不可なりとせず、若し其人が突然死するも、若し其人が不幸にして火災に遭遇するも、若し其人が病氣に罹るも、貸したる金の損を來さざる決着の付きたる以上は、信用貸甚た良し、併しながら萬一の時は例外なり、其場合には損を爲すも止を得ずなど、の事ならば、寧ろ断して

貸す可らず、曰く金貸と慈善とは相異なればなり、之を混同する勿れ

泣言云ふ人には決して金を貸す可らず、泣言云ふ人は意志の薄弱なるもの也、意志の薄弱なる人竟に成功なし、コソナ人に金を貸すは恰も捐てるが如けむ

金を貸すは利足を取る爲めとのみ考ふ可らず、貸したる金の爲に世を益するや否やをも考ふべし、世に益せざる金の貸方は決して爲すべからず

貸したる金は期日に至り借主が感謝して返し來るようになさざる可らず、借主を喜ばしめお蔭にて利益を得ました

と言はしむるの技倆なくんば、未だ金貸の上手と言ふ可らず

嗔嘩顔にて返金せしむる貸方は甚だ拙なりと云ふべし、畢竟利足のみを得んとするの考なればこそ然るなれ

金を貸す上に於ては決して情誼を容る可らず、情誼の爲に金を貸すならば決して利足をめてにすべからず、又返済期限も定む可らず、先方の返し得る時を俟つべし、時に或は其金を與ふる位の覺悟を持つを要す

高利を貪る可らず、高利を厭はず金を借る人は甚だ危険なり、他に融通のつかぬ人なり、コソナ人を相手とすべからず、

力めて避くべし

金を貸す人は金を借る人より利口ならざる可らず、若し之に反する時は貸したる金は貸金にあらざして損金と化するを考へよ、損金を貸金と考へる者程憐むべき者はなし、斯かる借主程憎むべき者はなし、抵當物を賣らざれば返し得る見込のなきものへは決して貸す勿れ、他より借替ざれば返し得る見込のなきものへは決して貸す勿れ、貸せば容易に取り得らるゝものにあらず、之を無理に取らんとすれば即ち其人を殺すものなり、怨恨は貸主の一身に集りて恰も悪魔と同視され、竟には郷黨間

の共に齒するものなきに至る、要するに貸金の方法を能く領得せざればなり

金は無闇に貸す勿れ、一錢の金たりとも貸さんと欲する以上は能く其始終を考ふべし、考の足らずして金を貸す以上は借りたる人は却て不幸を招き、貸したる人は竟に損失を見るなり、蓋し共倒とありて終らむのみ、其始を慎め、菓子折の爲に心を枉ぐる勿れ、心に會せざる處あれば、勇氣を奮て、斷然と之を謝絶せよ、この勇氣ありて始て人は安全なるを得べし、この勇氣なき人は金を貸すことを止めよ、而して寧ろ其人に之を與ふべし、貸すと云ふも與

ふると云ふも其歸する處は同一なりとせば、最初より與ふ
ると云ふ方が先方も安心なり、當方も心持良し
貸金法に就ては前段略其の要を述べ盡せり、敢て又た多言
するの要を認めず、而かも讀者は言の簡なるを以て之を忽
諸に附する勿れ、幸に之を味ふに於ては眞理其中に存すべ
し

第五 貯金法

貯金は富を得るの最も確實なる方法にして、假令迂遠の感
あるも決して之を等閑に附す可らず、而して貯金の効能は

己れも若い時は天秤
捧まで擔いで稼いた
が不動貯金をして置
た御蔭で今は樂な身
になつたお前たちも
不動貯金をせなければ
ばなりませんよ



永く持續するに於て其利益の最も顯著なるものなれば其の方法を撰擇するを要す。其方法としては予が考案に係る不動貯金の法に據るを以て第一と爲す。左に其大要を記述すべし。

第一 不動貯金の由來

勤儉貯蓄の美風を我國人に感染射行せしむるは刻下の急務にして、其如何なる方法が貯蓄獎勵に適當なるやは今日最も研究すべきの要務なり。予は我國人の貯蓄志に乏しく、之を外國の例に較べて、天地の相違あるを見て、慨嘆の情

禁む難く、之が爲に幾多の月日を其研究に委ねたり。幸なるかな、予輩の苦心竟に空しからずして、茲に一の方法を考案し得たり。之を名けて不動貯金と云ふ。動かさずして金を貯めると云ふ意味なり。

第二 不動貯金の方法

不動貯金は左の十種に分る、長期の定期預金にして、一口を金壹圓以上と定め、一度預け入を爲して、其期限に到れば、左の如き元利増殖額を受取らるゝなり。

△五年目拂戻

元金の壹倍半

(元金壹圓なれば 壹圓五拾錢)

△十年目拂戻 元金二倍半

(元金壹圓なれば 貳圓五拾錢、以下之に準ず)

△十五年目拂戻 元金の四倍

△二十年目拂戻 元金の六倍

△二十五年目拂戻 元金の十倍

△五十年目拂戻 元金の百倍

(元金壹圓なれば 壹百圓)

△七十年目拂戻 元金の千倍

△百年目拂戻 元金の萬倍

△二百年目拂戻 元金の十萬倍

△三百年目拂戻

元金の百萬倍

(元金壹圓なれば 壹百萬圓)

此拂戻額の利率は、五年目拂戻の分年八分五厘、二十年目拂戻の分は九分五厘、十年、十五年、二十五年、五十年、七十五年、百年は皆年九分七厘五毛、二百年は年六分、三百年は年四分七厘五毛、毎年一回の複利を以て計算し、端數を切捨たるもの也。不動貯金は期限中引出すことを得ず、但し左の期間を過ぎたる後引出を望む者には特に元金額だけを拂戻すこととすべし。

五年目拂戻は

滿 二 年

十年目拂戻は 満 三 年
 十五年目拂戻は 満 四 年
 二十年目拂戻は 満 五 年
 二十五年目拂戻は 満 六 年
 五十年目拂戻は 満 七 年
 七十五年目拂戻は 満 八 年
 百年目拂戻は 満 十 年
 二百年目拂戻は 満 二十 年
 三百年目拂戻は 満 三十 年
 不動貯金は満期後の利子を附せざるものとすべし不動貯

金は受取の権利を他人へ移すことを得べし、此場合には預
 金證書の裏書を以て之を證明することゝなす
 不動貯金の證書は擔保として銀行より借入金をなすこと
 を得べし、假令は百年目拂戻の口へ預けたる壹圓の貯金證
 書を五十年目に銀行へ持参せば銀行は壹圓の此貯金證書
 に對して百圓迄の信用を限度として貸金を爲すことを得
 べし、何となれば最初預りたる壹圓の金が五十年目に既に
 銀行の帳簿に於ては百圓の額に利倍増殖してあればなり、
 故に中途金の入要あるも貯金を引出すの要もなく、預金主
 は預けたる初一念何處迄も貫くことを得べし

第三 不動貯金の計算

僅か壹圓の金が十圓、百圓、千圓、萬圓、十萬圓、百萬圓の大金と
 なるといへば何人も不思議の感に打たるゝなるべし、左り
 ながら嘘でなき證據は矢野恒太氏著の複利表に據るも明
 瞭なり

第四 不動貯金の利益

不動貯金を預けたる人の利益は左の如し

(一) 初め一度元金を投ずるのみにて、日々月々に預け入る

の面倒なく、而して普通日懸月懸の貯蓄よりも多大な
 る利殖額を得るなり、故に少年の人に在りては出生の資
 本となるべく、中年の人に在りては半世の養老資となる
 べく、又子女の學資、嫁入費の一半を補ふに足るべし

(二) 又例へば貳圓を毎月貯金し、廿五年目受取となすとき
 は廿五年後の今月より毎月貳拾圓づゝの月給を得ると
 同じ勘定なり、少年時代煙茶費の一半を省くの効大なり
 と云ふべし、若し五圓、十圓を月懸貯金と爲すに至りては
 其効果實に夥大なるものなるべし

(三) 子孫の爲めに金錢を遺さん、例へば壹圓づゝ七十五

年目受取「百年目受取の二種に預け置くときは其時に當る子孫は千圓一萬圓と云ふ巨額の遺財を受け取らるゝが故に其惠澤は實に莫大なるものと云ふべし然れば子孫の爲めにとて辛苦して金を貯ふるの勞もなく何人にも出来得らるゝ遺財の良法なり

(四)又此不動貯金の預金證書は(紙幣大にして鮮麗なるもの)他人の壽賀を祝する贈物ともなり災厄を見舞ふ進物にも適す又公共に獻し慈善に用ひ或は神社佛寺の維持費に奉納する如き至て便利にして且一時に現金を贈るよりも遙かに高尚にして有益なる物品なり

(五)又此證書は婿入嫁入の持參金には最も適當とす

不動貯金を預かる銀行の利益は左の如し

(一)不時の取付に遭遇するの危険なければ安心して營業する事を得べし隨て世間の恐慌に連れて破綻を來すの憂決してあるべからず

(二)長期の定期預金なれば平素多くの準備金を要せず

(三)一度預ければ跡々の手數も入らず費用も懸らざるなり

不動貯金の爲に社會の蒙むる利益左の如し

(一)世人をして貯金の必要を感知せしむるの効大なり

- (一) 零碎の金を有要の資本と化せしむるの効あり
- (二) 貧富の懸隔を減殺せしむるの効あり

第五 不動貯金の優勝なる點

小資を吸収するの策にして種々なる方法を案出するも今日
 の處にて不動貯金に優るものなきを信ず、其理由左の如
 し

- (一) 目下世間に行はるゝ貯蓄奨励法なるものを見るに、其
 多くは富籤に類似するものなり、人の射倖心を利用する
 ものなり

(二) 然るに不動貯金は普通一般の貯金法にして富籤に類
 するの恐もなければ又人に射倖心を利用するが如き陋
 に陥らず

(三) 夫の勸業債券の如きは、甘く籤に當る人が四十年間に
 金貳拾圓の外に千圓の割増を得る勘定あるが、是は萬に
 一のみ、其大部分は當籤など素より望むべからず、然るに
 不動貯金によれば貳拾圓の元金は五十年目に間違もな
 く貳千圓を得らるゝなり、其得失比較する迄もなし

(四) 夫の奨励貯金の如き籤に當れば廿年間に元金の二倍
 を得らるゝ勘定なるが不動貯金は廿年目に六倍を得ら

る、ことゆへ是も較べものにはならざるなり

(五)夫の生命保険の如きも又不動貯金に及ばざるべし何となれば生命保険は壯健の人にあらざれば保険をつけざる事も叶はずつけた後も毎月或は毎年掛金なすこと故其面倒非常なり一度にても掛金の期日をあやまると保険契約は直に無効となるなり又生命保険は長命の人ほど掛金を餘計にかけることとなる故に丈夫の人に取るとは餘り得のものにはあらざるなり然るに不動貯金は其面倒もなく割合もよく逆も比較にはならざるべし又生命保険は其人死すれば其子孫は保険金を獲得すると

ゆゑ其保険金受取る側の子孫より言へば父母の早く死せんとを望むの不倫にも陥るの弊あるべし

第六 貯金の運轉

五十年百年の後までも今日一定の利率を以て預金するは甚だ危険なりとの説もあらんかなれども予輩は左の如く答へんとす

(一)世の進歩に連れて金利の下落するは經濟の原則なれど此處五十年や六十年は前段の利子を以て預かるも少しも危険を覺へざるなり過去五十年百年の前を顧みて

其然るを知るべし、日本銀行の利子の如きは素と標準利率にして中流以下に於ける實際の金利と雲泥の相違あるは勿論、今若し中流以下を相手とし運轉するに於ては些の心配をも要せざるなり

(二) 不動貯金十種の中にて最も高き利子の口は九分七厘五毛なれば、それ以上運轉すること出来ずと假定し辛ふじて預りたる利率に廻したるものと見るも猶非常の利益あるものなり、其理由は左の如し。今日預りたる壹圓の金を年九分七厘五毛の利廻にせば百年目に元利合計一萬九百七十六圓餘となる、其内壹萬圓を預け主へ拂渡す

も残る九百七十六圓は全く銀行の利益となるなり、然れば今日壹萬圓の預金ありとせば其剰餘の金高のみにて實に九百七十六萬圓の巨額に達するなり、若し年々一割以上に利廻せば百年間に得るところの利潤は幾何なるかを知るべからず

(三) 不動貯金の中にて九分七厘五毛の分の利率は高歩なるの感あるべしと雖も、是は左の分を以て十分に埋合はつくものなり

(一) 三百年目拂戻の分は利率僅に四分七厘五毛に過ぎざる故、今日の場合に於ては非常の差益ありと云ふべ

し此差益を以て埋合も出来るなり

(二)又普通一般の銀行は年二回の複利なるに不動貯金は年一回なれば其差も積んで莫大の金額となるべく此差益を以ても埋合は出来るなり

(三)不動貯金は長期の定期預金なれば準備金なるものは其多きを要せず預りたる大部分は安心して貸出することを得れば此利益も莫大なり

(四)不動貯金は一度限りにて跡々の手數と費用とを省き得るなり

(五)又別に不動貸金の方法も設けおれば少しも心配を

要せざるなり

第七 不動貸金の方法

貯金にして前記の長期預金の方法あり貸金に就ても亦長期返済のものあるを權衡上至當と認めたると、一は永年間資本運轉に對する利子の平衡を期せざるべからざる必要あるとに因り、別に「不動貸金」なる一種の「長期貸付」の方法を設け「不動貯金」と關聯して自他共便ある融通機關を作成せり、今之を概説せんに

「不動貸金」は其額を百圓以上千圓未滿とし利子を年一割

二分か五分に定め辨濟期限を廿五年とす而して連帶責任ある保證人二名以上を立てしめ所謂對人信用を以て貸渡をなす但借入の初め其借入金の十分一を不動貯金の廿五年目拂戻の分へ預け入れしめ其貯金證書を元金の擔保として銀行に預り置くものとす故に借入人は期限間利子のみを拂込めば元金は貯金の利殖額と相殺し得る方法なり

第八 不動貸金の利益

不動貸金は無擔保對人信用にして長期の貸付を爲し別段

元金の返濟も入らざること故借手の便益擧げて云ふべからず商人の資本に乏しきもの、借入には至極便利なるべし、學資の乏しき書生の借入にも便利なるべし、固定資本を要する工業家の借入にも便利なるべし、學校寺院の建築、修繕に要する費用に借入るゝも便利なるべし、要するに中流以下に取りて缺く可らざる必須の金融機關たるを疑はざるなり

第九 不動貯金及不動貸金の趣味

此方法を利用して種々面白き趣向も浮ぶなるべし、深く研

究するに於ては趣味の津々として盡きざるものあるを知らむ。

第十 不動貯金銀行の設立

本法の有益にして貯金奨励の一新策なるを感知せられ、普く世に知らしめんと目的を以て小堀清外六名の諸氏發起となりて百四十有餘名の株主を糾合し昨年十一月十五日東京市芝區櫻田本郷町十番地に於て不動貯金銀行を開設し目下頻りに其方法實施中なり、聞く處によれば五十年以上拂戻の分希望者最も多しと云ふ、此方法の最良にして

且つ長期貯金の全く時勢に順合せるを知るに足らむ一

第六 結論

あゝ金！金！！金!!! この金の爲には、洋の東西を問はざる也、時の古今を論ぜざる也、親も子も兄弟も縁忽ち離れて他人より甚し、この金の爲には可憐の少女も哀れ鬼の食餌となりぬ、この金の爲には流石の英雄豪傑も竟に夜逃の悲劇を演じぬ、この金の爲には身を賣り節を屈する者嗚呼何ぞ枚擧に遑あらんや、此間の景状を叙し來るに於ては興味最も深かるべし、是等金より生ずる社會上の出來事に就ては、

他日稿を改めて諸君に見ゆるの機あるべし幸に之を諒せ

此小冊子素より見るの價値なかるべしと雖而かも其間
一片の眞理の存する處を味ふに於ては又た聊か裨補する
處なしとせんや

謹で讀者に謝す金に就ては猶言はんを欲する處のもの
多々これあり而かも身の多忙なる之を許さずして茲に攔
筆するの遺憾に遭ふ諸君の寛太ある幸に之を恕せられよ

金 終

明治三十四年七月廿九日印刷

明治三十四年八月一日發行

金 奥 附

定價金拾五錢

著者 兼發行者 牧野元次郎

印刷者 東京市京橋區日吉町四番地 渡邊爲藏

印刷所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

發行所 東京市芝區西久保櫻川町廿番地 銀行新聞社

9/35

銀行新聞

◎購讀料は郵税共半年分僅に三十錢
一年分六十錢但前金を要す
◎廣告料も至極の低廉にして利目は
非常也

◎毎月十日、廿日、卅日の三回發行

銀行新聞は日本の銀行界に於ける唯一の新聞也、趣味と有益とを兼備するは勿論にして、其説く所は公平、雄大なり、實に斯界の燈明臺と云ふを得べし

銀行家座右銘の大懸賞募集あり、青年銀行家十傑の投票募集あり、牧野生の會心録は趣味衰々として湧くが如く、無禪子の銀行茶話は愈々出で、愈々面白く、佐野高等商業學校教授の銀行學は材料豊富にして高尚なり、人物短評は寸鐵人を斬るの概あり、此外三行評、投書箱、小説欄は何れも甚だ賑かなり

僅かなる金を投して試に銀行新聞を購讀し見よ、其興味は盡きざると黄河の水の如けむ、青樓一杯の酒の能く及ぶ處にあらざる也、幸に一讀の榮を賜へ

發行所

東京市芝區櫻川町廿番地
電話(新橋二、廿六番)

銀行新聞社

稟告

○不動貯金は正確なる數理の上に立られたる最新最良の貯金法にして僅か一圓の元金が十圓百圓千圓萬圓十萬圓百萬圓の大金となる者也

○不動貯金は老後の自活料を作るに最も適當也

○不動貯金は父兄たる者が子弟のため教育費を作るに最も適當也

○不動貯金は父祖たる者が子孫のため遺財を作るに最も適當也

東京芝區櫻田
本郷町十番地
株式會社

不動貯金銀行

電話新橋(二千三百十二番)

○不動貯金の取次は格別手数料もかゝらずして其の得る處の利益は莫大なり

○不動貯金の取次所は全國至る處に設置する積なり、既に設置したる箇處は二百以上に達す北は北海道より南は九州の邊隅まで

○不動貯金の代理店も漸次全國樞要の位地を選びて普く設置する筈也

○不動貯金の取次所或は代理店引受を希望するもの及不動貯金の規則を知らんとする者は必ず郵券三錢封入請求すべし

廣告

株式會社 不動貯金銀行

取締役頭取 小堀 野
 取締役 島田 猪野
 同 兼坂 市
 同 林 久一
 同 南 野
 監督 牧野 元次
 監査 野元次
 監立 郎平郎松吉治清

○明治三十三年十一月創立
 ○本行ノ存續ハ無期限
 ○本行ノ取締役ハ連帶無限の責任を負ふ
 ○本行ハ預金拂戻保證トシテ政府へ公債證書ヲ供託ス

不動貯金取次所人名

新潟縣

西蒲原郡米納津村富永
 同郡增根村
 同郡鎧郷村大字車郷
 中魚沼郡十日町
 同郡馬場村
 同郡中深見村
 東頸城郡中保倉村上猪子田
 西頸城郡西早川村清水山
 古志郡長岡本町
 南蒲原郡今町横街
 同郡西大崎村
 南魚沼郡三條町字日吉町
 南魚沼郡大和村大里

栗林米吉
 小出惣吉
 真島福藏
 田村愛一
 丸山芳太
 樋口久吉
 永井清一
 渡邊春吉
 土田元吉
 早川勝郎
 大田八郎
 成田八郎
 鹽谷傳次郎

長野縣

北魚沼郡小千谷町
 岩舟郡村上町
 同郡同村
 佐渡郡相川町羽田
 中頸城郡黒川村芋島
 中魚沼郡仙田村
 同郡直江津町
 同郡高田町
 同郡榑池村梨窪
 佐渡郡新木町
 同郡小島町
 西蒲原郡彌彦村
 三島郡善高村
 諏訪郡湊村
 同郡宮川村
 同郡同村
 同郡下諏訪町

青木甚右衛門
 佐藤東三郎
 青藤山佐一郎
 渡部八太郎
 柳澤新太郎
 中條庄吉
 和田慶作
 和田貯蓄銀行
 高田田
 池田田
 山本藤留六
 塚原與右衛門
 國島友三郎
 大久保庚平
 小坂佐嘉五郎
 濱角榮正藏
 兩角兼一
 宮坂正藏

同郡中洲村
東筑摩郡松本町地藏清水
同郡里山邊村
同郡會田村
上伊那郡伊那富村
下伊那郡座光寺村
上高井郡須阪町
下高井郡中野村
同郡豐鄉村
南安曇郡梓村
北安曇郡社村
北佐久郡三岡村
諏訪郡富士見村
高井郡夜間瀨村

千葉縣

同郡成田町成田
同郡成田町成田

同郡公津村飯田新田
同郡木下町
同郡八街村
同郡佐倉町
同郡白井町角來
同郡志津村小竹
同郡豐住村南羽島
同郡富里村新橋
同郡久住村土室
同郡八生村
同郡武緣海村松夕谷
同郡公平村姬島
同郡陸岡村
千葉郡譽田村高田

茨城縣

久慈郡天下野村
稻敷郡龍夕崎町

笠原重之
小原八重
花岡伴重
溝口琢磨
有賀辰十郎
吉川德彌郎
永井庄吉
關野六三郎
河野房吉
佐原英房
橫澤國次郎
小澤林福彌郎
小窪田仲藏郎

牧野芳兵衛治
菅谷忠吉
櫻井忠吉

石原右衛門
小川房七
渡邊長充
下村太
原田彦太郎
兼坂退藏
秋元五平治
日暮治郎兵衛
綿貫信之助
小倉康吉
竹尾定藏
矢田部米藏
東條藤吉郎
宍倉常三郎
石井茂三郎

木下秀之介
川北萬次郎

稻敷郡生板村大板
新治郡石岡町
多賀郡松原町島名

東置賜郡漆山村
飽海郡南平田村山谷
西置賜郡長井町

秋田縣

仙北郡角館町
山本郡能代港島町
平鹿郡横手町大町
南秋田郡一日市村
仙北郡大曲村
平鹿郡増田中町
北海郡
札幌南三條通三丁目
小樽稻穂町畑

大野庄策
小沼唯四郎
蛭野己次郎

多勢吉之助
齋藤喜一
青木儀藏

佐藤竹松
大久保銀行
吉田藤枝
小野市五郎
渡邊榮助
廣島善左衛門
佐々木力太郎
同

江差姥神町
空知郡岩見澤町
後志郡岩内町大字橋

靜岡縣

駿河國駿東郡高根村上小林
同村清後
同國同郡玉穗村中畑
伊豆國賀茂郡竹麻村手石
遠江國小笠郡掛川町

愛知縣

名古屋市天王町

福嶋縣

石城郡平町新川町

巖手縣

東磐井郡黃海村二日町

上工藤松藏
升本よぬ

林儀三郎
土屋安虎平
塚本佐兵衛
松本吉一
室塚吉一

村瀬芳太郎

中野勇吉

菅原英彦

西磐井郡日形村

青森縣

青森市大町

三戸郡八戸町三日町

同所下組

北津輕郡金木村

岐阜縣

大野郡高山町

養老郡牧田村

稻葉郡上加納吉屋町

吉城郡船津町

滋賀縣

高島郡廣瀨村上古賀

蒲生郡櫻川町平林

山梨縣

十

小野寺善作

渡邊文助
浦山政吉
是川恒藏
津島忠次郎

藤井孝太郎
桐山小市郎
馬淵與曹
吉井孝七

柴田慧眼
小林由之助

尾形貫一
井上角右衛門
前田瀨平
赤池瀨平

關戸捨吉
上多助七
櫻木順作

平井甚兵衛
稻垣虎雄
高瀨佐久次
石元秀之

宮代萬治
神田辰之助

十一

石川縣

加賀國能美郡小松町龍助町

能登國羽咋郡中莊村上田

同鳳全郡輪島町河井町

富山縣

富山市東三番町十番地

同市桃井町九十五番地

東礪波郡尻村二日町

射水郡下關村下關

和歌山縣

東牟婁郡新宮町

西牟婁郡串本町

同郡潮岬町上野

大分縣

豐後國北海部郡臼杵町

兵庫縣

播磨國飾磨郡城北村ノ内平野村

但馬國城崎郡津居山港

但馬國氷上郡小川村ノ内岩屋村

但馬國美方郡濱坂町

鳥取縣

伯耆國西伯郡所子村大字唐王

岡山縣

備中國淺口郡龜島村

備中國吉備郡高松村

備中國淺口郡西ノ浦村

瀬戸俊次郎

日高權藏

池内松之助

泉井忠太郎

酒井富太郎

山野義九

山根楨藏

八代宇平治

和氣治郎

矢部逸次郎

廣島縣

加茂郡川上村大字飯田

備後國御調郡今津村字津蟹

備後國神石郡永渡村字永野

山口縣

周防國大島郡久賀村

長門國美稱郡於福村

周防國大島郡蒲野村

東京府

麴町區飯田町三ノ廿三

南多摩郡八王子町馬乘

京都府

丹後國與謝郡宮津町

同國中郡峯山町字泉

大阪府

瀨戸俊次郎

日高權藏

池内松之助

泉井忠太郎

酒井富太郎

山野義九

山根楨藏

八代宇平治

和氣治郎

矢部逸次郎

廣島縣

加茂郡川上村大字飯田

備後國御調郡今津村字津蟹

備後國神石郡永渡村字永野

山口縣

周防國大島郡久賀村

長門國美稱郡於福村

周防國大島郡蒲野村

東京府

麴町區飯田町三ノ廿三

南多摩郡八王子町馬乘

京都府

丹後國與謝郡宮津町

同國中郡峯山町字泉

大阪府

瀨戸俊次郎

日高權藏

池内松之助

泉井忠太郎

酒井富太郎

山野義九

山根楨藏

八代宇平治

和氣治郎

矢部逸次郎

廣島縣

加茂郡川上村大字飯田

備後國御調郡今津村字津蟹

備後國神石郡永渡村字永野

山口縣

周防國大島郡久賀村

長門國美稱郡於福村

周防國大島郡蒲野村

東京府

麴町區飯田町三ノ廿三

南多摩郡八王子町馬乘

京都府

丹後國與謝郡宮津町

同國中郡峯山町字泉

大阪府

福地勇治

川合市五郎

岡野林吉

今田元一

佐々木正夫

藤井魏三

阿野仁平

富士光住吉

相見永七

和泉國泉南郡貝塚町
大阪府西區三軒字下ノ町三八六
和泉國泉南郡長瀧村

神奈川縣

三浦郡橫須賀町字汐入
足柄下郡小田原町萬年町
愛甲郡依知村上依知

埼玉縣

北足立郡蕨町蕨
北埼玉郡不動岡村

群馬縣

群馬縣車鄉村富岡
前橋市北曲輪町
利根郡久呂保村
多野郡神川村

栃木縣

上都賀郡足尾
那須郡那珂村小川
上都賀郡日光町

奈良縣

磯城郡初瀬村
山邊郡二階堂村西井戶堂

原田忠次
吉田忠次
喜多義諦

小野八郎
今井團藏
大野國作

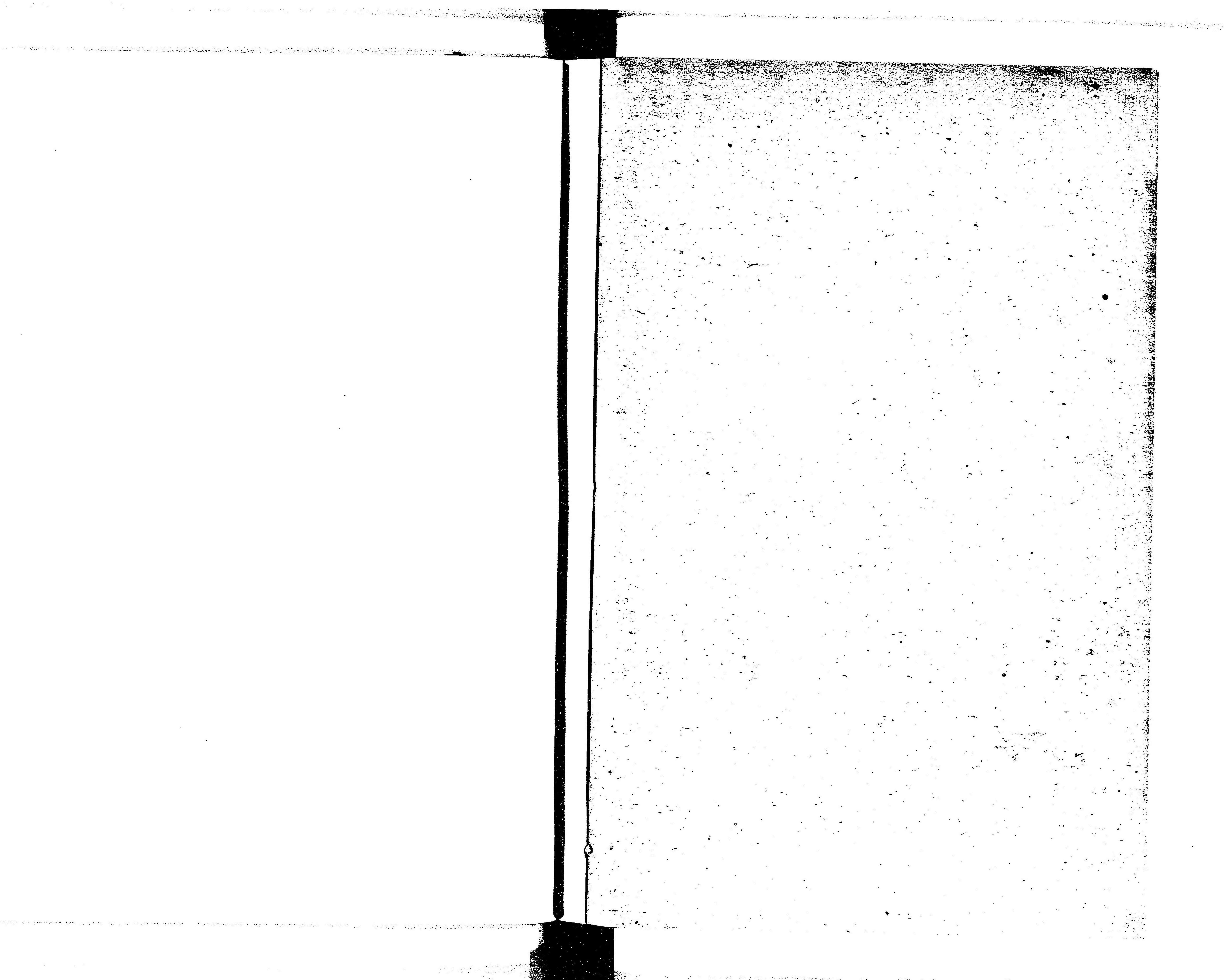
山崎榮助
鳥海龜太郎

西山要作
柴崎文次郎
林崎文次郎
高橋宇吉

高橋靜一
薄井才吉
今井平吉

木村かみ
藤本達一

IT3R-26



1950

金

国立国会図書館。

29

268

040944-000-5

29-268

金

牧野 元次郎 / 著

M34.8

BDF-0043

